



来し方・行く末



理事 橋本 富明

広報誌5月号が出る頃には、多摩川の河口から沢山の稚鮎が遡上を始めている。近頃では「江戸前あゆ」という名前がついたその数は年々増え続け、昨年度は1,230万匹ともいわれる。春先から夏の終わりまで、上流を目指して70キロ上流の青梅市あたりまで遡上していく。これだけの鮎が遡上してきたら川は鮎であふれかえってしまうかと思いきや、残念ながら我が羽村市まで上れる鮎はほとんどいないのは、途中の14の堰堤によって行く手を阻まれているのが原因である。堰には「魚道」と呼ばれる魚の抜け道がついているが、魚の習性と川の水量により、ほとんどの魚道がその機能を果たしていない。本来、淡水と海水を行き来する多くの魚や生きもの達（鮎・ヤマメ・ウナギ・藻屑ガニ・マルタ等）の行く手を阻んでいる。堰堤の下は遡上できない魚たちが群れをなし、鷺や鶉たち水鳥の格好の餌場となっている。私事であるが、数年前から奥多摩川漁業組合の役員となった。漁協の仕事を少し紹介すると、4月の終わりに「鮎（ハヤ＝ウグイ）の群来（くき）付け」をする。浅瀬の水通しの良い場所に、鋤簾や鍬を使い小石をまいての産卵場所を作ってやる（初めて見る人はまるで川を耕しているみたいに見える）。すると、産卵を控え体色をオレンジ色に変えたウグイたちが次々と集まって産卵していくのである。冬には川鶉の捕獲もする。生きたニジマスに針をかけて泳がせながら、太いテグス（糸）を石を入れた玉ねぎの袋に結び、鶉がもぐりそうな川の深みに仕掛ける。漁が禁漁になる11月から2月まで、凍るような川に浸かりながらの作業である。それでも地元のオジサンや御爺さん達が集まって実にみんな楽しそう。自然保護団体には怒られそうだが、むろん東京都の捕獲許可証を携えている。皆、何とか多摩川を以前の昭和の2～30年代の頃に戻そうと頑張っているのだが、そこには多摩川での共通のあそび体験があったから、川がみんなの社交場でいろいろな楽しみを共有していたから、世代が違ってても身分が違ってても仲間意識ができ、同じ気持ちでボランティアができる。

先日、2040年人口推計が出たが、多摩地区では微増の稲城・三鷹・東村山3市を除いて軒並みマイナスとなる（西多摩ではとくにマイナスであるが）。問題なのは数だけでなくその構成である。人口が下がる・高齢化率が上がる・出生数は激減する。いくら少子化であっても絶対に困らない待機児の多い区部と、いくら頑張っても子どもが集まらない多摩地区の格差がある。そして保育の現状はというと、今年から検討を開始する区市町村の「子ども・子育て支援事業計画」に基づいて進められる。ということは将来の保育園経営についての分岐点は、今年であることに間違いはない。どんなニーズ調査をしてどんな方向に向かうのか、施設型給付の対象施設は地域ニーズの中で何がどれくらい必要なのか、いくつの幼稚園が幼保連携認定こども園として生まれ変わるのか、保育園はこのままでいくのかいらないのか…。少子化構造の中で園児の獲得合戦が始まり、整理縮小・合併吸収などという時代が遅からずやってくるのではないか。私たちは、いま分岐点にいる我々の置かれた立場を理解し、将来への禍根を残さぬように行政の動きに注視し、積極的に行動していかなければならない。

近頃は川で遊ぶ子供たちの姿をほとんど見なくなった。夏には親子釣り教室やキャンプなどを開催する予定でいるが、人類が有史以来続けてきた川での営みが、保育園の親世代からぱつんと切れている。何とか親も子も川に連れ戻し、再び活性を取り戻し、本来、子ども時代に享受しなければならない自然との数えきれない楽しさや森羅万象を味わえる場にならないか、願わくばその中に我が身を置くことができないか。まるで河口堰のように、目の前に立ちはだかる書類の山に埋もれパソコンとにらめっこをしている現状ではあるが、毎日毎日夢を見続けている。